

優秀賞

祖父の涙

神奈川県 聖園女学院高等学校三年 横井 麻莉奈

七年前の二月七日。家族で出かけた帰り、父の携帯に一本の電話が入った。もしもし、と電話に出た父の二言目が讃岐弁に戻ったため、父の故郷である香川県の祖母からだ、とすぐに分かった。香川県に住む祖母は遠地に住む私達家族を気にかけて、いつもダンボールいっぱい野菜やうどんを詰めて送ってくれていた。数年に一度しか会いに行くことが出来なかったが、いつも電話で幼少期の父の話や祖母が飼っている犬のジョニーの話をしてくれる二人のことが私は大好きだった。だが、いつも二人からの電話は固定電話にかけられ、私達が出られなかった時は後で改めてかけてくるか、私達が折り返しの電話を入れるかのどちらかだったため携帯にかけてくるのは珍しかった。それでも私達はまさかその電話が祖母の死を伝えるものだととは夢にも思わなかった。

突然の訃報を受け、私達はすぐに祖父の住む香川県に向かった。香川県へ向かう車内でふと、いつも電話で聞いていたあの優しい声が二度と聞けなくなるのだ、と考

えたら次々と祖母との思い出がよみがえり、私は胸にぽっかりと穴が開いたような悲しみに襲われて涙が止まらなかつた。

泣きながら寝てしまい、翌朝起きると既に祖母の家の前に着いていた。車を降りてふと父を見ると目元が赤くなっているのに気づいた。私にはそれが夜通し運転した疲れのせいだけではない気がした。

家に入ると居間には、祖母の兄弟姉妹が集まっていた。私が両親に倣って挨拶をすますと祖父が私を呼び、手招きしているのが見えた。隣に座ると祖父は、また背が伸びたな、元気やったか、久々にジョニーと遊んでいくか、と目を細めながら言った。祖父の変わりない調子に安心する反面、悲しくないわけないだろうにそんなそぶりも見せず普通でいられるのだろうかという思いに駆られた。

私が祖母に会ったのは通夜の前だった。祖母は浴衣を着て布団の上に横たわっていた。生前と変わりない姿だったが、血の気を失った蒼白な祖母の顔色とそっと握っ

た祖母の手の冷たさに、もう二度と話すことができず、本当に亡くなったのだと実感させられて再び涙が滲んだ。通夜が終わり、翌日の告別式、火葬、骨上げと滞りなく式は進んだ。私は別れが近づく毎に祖母への思いが強くなり泣き続けていた。しかし祖父は式の最中も一度たりとも泣くことはなかったのである。私は祖父母が結婚したのは一九五〇年前後だと聞いていた。なぜ半世紀以上を共に過ごした人を亡くして涙を我慢できるのか、なぜ一番悲しいはずの祖父が涙を見せないのかと疑問に思った。

祖母の葬儀後、祖父は市内の病院に入院することが決まった。元々脾臓を悪くしていたのだが、祖母が家一人になるからと入院だけは拒み続けていたそうだ。そして祖母の遺品整理や祖父の入院手続きを終え、私達は神奈川県へ帰ることになった。そのため香川県を発つ日、最後にもう一度祖父のお見舞いへ行った。病院に着くと父母から、売店で飲み物を買って行くから先に病室へ行って欲しい、と言われたため私は一人で祖父の病室に向かった。

病室を訪れると仕切りのカーテンがかかっていた。寝ているのかもしれないと静かに近づいてカーテンの隙間から中の様子を見ると、ベッドに腰掛けて写真を見ている祖父の姿があった。何の写真だろうとカーテンを開けようとした時、初めて祖父が泣いていることに気づいた。



見ていたのは祖母の写真だった。祖父は余りにも突然であつた祖母の死を受け入れられず、今まで泣くことも出来なかつたのかもしれない。祖父は茫然と写真を見つめながら、ぼろぼろと静かに涙をこぼしていた。そんな祖父の姿に祖母への愛情の念を強く感じ、私は胸が詰まる思いであつた。そしてなんて真っ直ぐで清らかな二人なんだらうと切なさで胸がいっぱいになった。その涙から大切な人を亡くした祖父の思いが痛いほど伝わってきて、とうとう私は父母が来るまでカーテンを開けることが出来ず、その場に立ち尽くしていた。

そして祖母の死からひと月経つた三月六日、祖父は病室のベッドの上で亡くなった。私はまるで祖父が祖母を追いかけていったように感じた。祖父の訃報を聞いた時、夫婦というものは、兄弟姉妹や子供がいてもお互いがいなくては成り立たないもので、現に祖父母も互いに支え合つて生きていたのだと気づかされた。祖父母の死は悲しいが、言葉では表せない慈しみに満ちた姿を見せてくれた二人を私は理想の夫婦像であると思う。また毎年冬になると祖父母の姿に思いを馳せ、いつか共に生きたいと思える人に出会つた時、彼らのように支え合う関係でありたいと強く願うのだ。